

第1回ドイツ危機対応会議で特別講演を行いました (2017/11/29-12/1)

テーマ：市民の安全保護

会場：Rheinhotel Vier Jahrzeit (Bad Breisig, ドイツ)

2017年11月29日(水) - 12月1日(金)にドイツのBad Breisigで開催された第1回ドイツ危機対応会議において当研究所災害医学研究部門の江川新一教授が特別講演を行いました。

この会議は、ドイツを襲った2002年の洪水、ドイツ人が犠牲になった2004年のインド洋津波災害を受けて政府組織として設立された国民危機管理庁の下部組織である危機管理研究所がはじめて開催する会議です。開催のきっかけになったのは2015年から2016年初頭にかけてシリアからの多数の難民をドイツで受け入れたことから、将来起こりうる災害を含めた危機的事象にどのように対処すべきかについて話し合うものです。

ドイツ政府、地方自治体、人道支援団体、ボランティア団体など多くの分野で危機対応に実際に関わっている参加者が一同に会して、NATOから提示された国民の1%に相当するような難民の受け入れや、大規模災害時にどのような被災者支援を行うべきなのか、実際に可能なのか、何に留意してどのような計画を立てるべきかなどについていくつかの分科会に分かれて活発な討議が行われ、プレナリーセッションでの情報共有がなされました。

江川教授は、すべての会議がドイツ語で行われたため、同時通訳の助けを借りながら『多機関の協力・協働を促進するためには』、『言葉を実行に』の2つの分科会での討論に参加しました。1日に1000人が流入する難民の受け入れはドイツでも東西合併以来の出来事であり、支援の初期から難民の尊厳を保ち、自律的な避難所運営をサポートすることの重要性、『〇〇ができない』ではなく、『△△ができる』ことを活かす被災者・難民救援の重要性について意見を発信しました。

江川教授は最終日に『地平線のかなたから』特別講演として登壇し、地震・津波・放射線事故が三重災害となった東日本大震災において、福島県の多数の避難者の推移をグラフにて示し、大規模災害における大規模避難の時間的、空間的な変化、人々の健康が受ける被害とその予防、身体的、精神的、社会的健康の達成こそが防災の重要な標的であることを示しました。同時通訳により、わが国がこれまでに培ってきたBuild Back Betterの概念、仙台防災枠組におけるPrioritiesとGlobal Targetの構造、すべてのクラスターが協力・協働することの大切さなどが十分に伝えられたと感じました。また、同じく特別講演としてイタリア中央部に起きた地震災害におけるイタリア政府の対応、被災地の現状と課題についてもイタリア政府危機対応部門から報告があり、くしくも日独伊の3国が危機管理について話し合うよい機会となりました。



多数の災害救援、人道支援に関わる団体からの参加者による第1回のシンポジウム



東日本大震災、仙台防災枠組、災害リスクについて特別講演する江川新一教授



分科会で同時通訳を介しながら討論に参加する江川新一教授